

私を育てた  
あの時代、あの出会い

第8回

# 中学2年生の時の出会いが 教師生活の原点となった

北海道 札幌市立山鼻中学校校長 町田啓道 MACHIDA HIROMICHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、町田校長が語る。

## 指導方針に迷った時こそ 原点に戻ることが大事

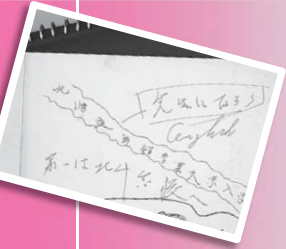
今の若い先生方は、昔と比べるとどのような指導方針で生徒と向き合うべきか、迷う場面が増えていると思います。背景にあるのは、学校教育への期待や要望の多様化です。私が教師になったばかりの頃、多くの保護者は自分の子どもに対して「元気で楽しく学校に通ってくれたらそれで十分」と考えていました。子ども自身も、友だちと一緒に楽しく勉強や課外活動が出来ることを、学校に通う一番の目的にしています。

た。学校や教師に求められるものとはとてもシンプルでした。

それが今は、「進学希望の実現」「部活動の充実」「生活指導の徹底」など、学校に対して求めることが保護者によって違います。更に、子どもは子どもで、保護者とは別の期待を抱いています。教師が「こういう信念を持って学級運営をすれば、生徒も保護者も自分を信頼して付いてきてくれる」という確固たる自信を持ちにくい時代になっていると思うのです。事実、若い先生方を見てみると、迷いを抱えながら生徒と向き合っている様子がしばしば見受けら



1965 (昭和40)  
北見市立光西中学校  
2年生の時、担任だった  
村上隆先生に憧れ、  
「将来は学校の先生になろう」と思う



中学時代、ノートの隅に、「教師になりたい」という思いと、そのための高校、大学の目標をつづった

1978 (昭和53)  
札幌市立北栄中学校に  
赴任

まちだ・ひろみち 専門教科は国語科。札幌市立丘珠中学校校長などを経て、2009年札幌市立山鼻中学校に校長として赴任。2011年度は北海道中学校長会会長を務める。

2003 (平成15)  
札幌市立丘珠中学校に  
校長として赴任

2006 (平成18)  
札幌市立元町中学校に  
赴任

2009 (平成21)  
札幌市立山鼻中学校に  
赴任

れます。

そんな若い先生方に私が伝えたいのは、「迷った時には、自分が教職に就こうと思った原点に戻るとよい」ということです。

## 生徒の目線に立って 私たちに接してくれた

私が教師になろうと思った原点は中学校2年生の時、担任だった村上隆先生との出会いにあります。当時村上先生は新卒2年目。私たち生徒は、少し年上のお兄さんが出来たような気分で、休日になると先生の下宿先に遊びに行ったものです。

でも、先生は単なる「楽しいお兄さん」ではありませんでした。一緒に遊ぶ一方で、私たちが善悪の判断を誤った時には厳しく叱る面もありました。生徒の目線に下りて来て私たちが接してくれる存在であったのと同時に、教師としての思いから生徒を導いていく存在でもあったのです。両方の視点を場面に応じて見事に使い分け、生徒を引き付け伸ばす――それが、私が村上先生に憧れ、自分も教師になろうと思った理由の1つなのだと思います。

今でも印象に残っている出来事が

あります。足に軽度の障がいがある生徒がクラスにいました。体育大会のある種目にその生徒が出場するかどうかを巡り、クラスは悩みました。「Aさんが出場すれば、チームは確実に負ける。それは嫌だ。でも、Aさんを置き去りにして勝ったところで、その勝利に意味があるのだろうか」という両極の思いの間で、私たちの心は揺れたのです。

先生は自分の意見を押し付けずに「どうすればよいか、みんなで一緒に考えてみよう」と言いました。私たちは「先生は僕らの考えを尊重してくれている」と感じました。

けれども、今思うと、先生は教師としての目線から「生徒たちはAさんをきつと見捨てたりしない」と見通しを立てた上で、今度は生徒の目線に立って私たちの迷いを理解し、「みんなで一緒に考えてみよう」と発言したのだと思います。そして、直面した問題を自分たちの力で解決させることによって、一人ひとりの成長を促そうとしたのでしょ

う。私も教師生活の中で、生徒と同じ目の高さで、彼らと接することを心掛けてきました。よく一緒に遊んだりしましたし、教師ではなく1人の

## 「迷った時こそ

## 教師を目指した原点に立ち戻る」



人間として、自分の過去の挫折経験を生徒に語って聞かせたりもしました。生徒はそういう話を聞く時、授業中とはまるで違う表情を見せるものです。

その一方で、私は教師としての思いを持つことも忘れないようにしてきました。場面に応じて自分の立ち位置を変えることによって、さまざまな角度から生徒に働きかけようとしたのです。こうした私の姿勢は、やはり私の原点である村上先生の影

響を受けていると思います。

教師を続けていると、迷うことの連続です。そうした時こそ「自分が教師を志した時、どんな教師になりたいと思ったのか」という原点に立ち返ることが大事だと思います。そうすることで、心の霧がすっと晴れて基本姿勢が定まるのです。私はこの3月に定年を迎えますが、「原点を忘れないことの大切さ」を時間の許す限り若い先生方に伝えていこうと思います。